【387】

氏　名（本籍）	藤森裕治（長野県）
学位の種類	博　士（教育学）
学位記番号	博　乙　第　2338　号
学位授与年月日	平成20年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**国語科教育実践場面における予測不可能事象の研究** －授業システム概念の構築と展開－

主　査	筑波大学教授	博士（教育学）	桑原　隆
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	平山満義
副　査	筑波大学教授	博士（理学）	井田仁康
副　査	筑波大学准教授	博士（文学）	岡本智周

論文の内容の要旨

1. 目的

国語科教育は，授業におけるコミュニケーションそれ自体に言葉の教育としての意義と役割を見出すところに一つの特色がある。この特色は，国語科教育実践場面を研究するにあたり，授業で生じる突発的な出来事や予想外の反応をも議論の対象に含めることを意味する。このような事象の多くは主体を狼狽させたり授業を混乱させたりするが，一方では主体の教材解釈を深化させたり，授業に新しい枠組みをもたらしたりする契機ともなる。本論文は，国語科教育実践場面におけるこうした実践事実を「予測不可能事象」と命名し，その特性や認知効果を質的に議論することができる授業システム概念の構築を目的としている。

2. 対象と方法

本論文では，初等中等教育の全校種にわたる国語科教育実践場面において生起した予測不可能事象を対象としている。これらは課題解明の方向性に即して各章の冒頭ないし前半部分で取り上げられ，エスノグラフィによる事例研究として分析と考察がなされている。取り上げられている事例は①短編小説の読み（中学校），②言語事項の学習（中学校），③詩の読み（高等学校），④短編小説の読み（高等学校），⑤詩の読み（小学校）の五つである。論証の方法は，最初に典型的な実践事実の分析と考察がなされ，そこから示唆される知見と関係諸研究の研究成果とを関連づけながら課題の解明を図るという方法がとられている。

3. 結果

第1章では予測不可能事象の具体的な実践事実を示すと共に，その教育的意義と研究的意義に関する先行研究の成果と課題を明らかにした。第2章では，教師の実践的思考と予測不可能事象の問題に焦点を絞り，自己組織性を手掛かりに授業システムの基本概念を定位した。第3章では，学習者を認知主体として予測不可能事象が発生する実践事実を精査し，学習者研究の視点を加えることの重要性及び有効性を論証した。続く第4章では，予測不可能事象を契機に授業システムを批評する能力について，中等教育段階の学習者の少なくとも一部は教師と同じ過程で予測不可能事象を認知し，授業システムを批評し得ることを解明した。第5章では，授業システム概念による研究方法が初等教育段階においても認められることを明らかにした。全

章を通して，予測不可能事象を契機として，教師と学習者が自律的にかかわりながら，授業システムを協同的に構築していくその過程を明らかにしている。

4. 考察

本論文では，授業システム概念を行為とシステムの相互規定モデルとしてとらえ，授業システムは授業としての行為が現実に行われて成立するという立場を提唱している。これにあわせ，予測不可能事象の認知主体が教師のみならず学習者にもあてはまるという仮説を事例研究を通して論証している。教師が自ら実践的思考を働かせて行為された授業の構造や秩序を把握したり，新たな授業計画を創造･再編したりするように，学習者も授業で産出された意味を独自に把握したり，その展開過程を批評したりする事実が解明されている。本論文ではこの事実が初等教育段階においても認められることを実証し，それを質的研究として議論するための研究方法論を構築している。これによって，予測不可能事象に着目した国語科教育実践場面研究は，学習者研究と実践的思考に関する研究とを連結して議論することが可能になったと考えられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は，これまで重要性は指摘されながらも体系的な研究がほとんど行われてこなかった予測不可能事象の積極的な意義やその実態を事例分析を通して明らかにしている。事例としては小学校から高等学校まで五つの事例が取り上げられ，いずれも丹念な記述と緻密な分析が行われている。さらにその研究方法を社会システム論を中心に関連諸科学から緻密に構築しており，国語教育界のみならず広く教育界において大きな意義と価値をもつ研究であり高く評価できる。特に，予測不可能事象の認知主体に学習者を加えたこと，授業を教師・学習者・級友による行為とシステムの相互規定モデルで定位したこと，学習者研究をも視野にいれた媒材概念を提示したことなどの点において本論文の独創性が認められる。また，小学生でも予測不可能事象を認知し，自ら授業システムのあり方を把握したり批評したりするという事実を捉えたことは，学習者研究の新たな知見を示唆するものである。一方，予測不可能事象を量的研究として分析・考察すること，授業システムをオートポイエーシス論の視点から研究することについてはさらに研究を深める必要があるが，これは今後の課題である。

よって，著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。